

〔續日本後紀<sup>仁三</sup>〕承和十年二月壬戌、散位從四位下勳七等大野朝臣眞鷹卒、中眞鷹雖素无文學、且好鷹犬、而砥礪從公、夙夜匪懈、十一月己亥、陸奥國磐城郡大領借外從五位下勳八等磐城臣雄公、書生黑川郡大領外從五位下勳八等靱伴連黑成並授從五位下、哀公勤也、

〔三代實錄<sup>光孝</sup>〕仁和三年八月七日戊申、散位從四位上文室朝臣卷雄卒、中直待仗下、日夜不出、宿衛之勤、當時无雙、

〔江談抄<sup>二</sup>〕忠文被聽昇殿事

又被命云、忠文爲近衛司、有聽昇殿、仰然而不承、仰云々、每陣直夜遣取寮御馬一疋立枕邊、常語云、聞馬食秣、不眠之計云々、

〔古事談<sup>六</sup>〕在衛大臣才學雖非絶倫、主上每有勅問、事明必申云々、是每參内所、入車之書一帙、

於途中見之、勅問事必今日所見之事也、仍主上深思、食才學由緒在之、由總夙夜格勤超倫云々、甚雨烈風之日、左衛門陣吉上云、縱雖在衛難參日也云々、其詞未終、笠ヲサシ、フカ沓ヲハキテ參ケレバ、見ル人皆感ケリ、在衛維時同時藏人藤内記江

〔宇治拾遺物語<sup>八</sup>〕是も今はむかし下野武正といふ舍人は、法性寺殿藤原に候けり、あるおり大風大雨ふりて、京中の家みなこぼれやぶれけるに、殿下近衛殿におはしましけるに、南面の方に

の、しるもの、聲しけり、誰ならんとおぼしめして見せ給に、武正あかかうのかみしもに、蓑笠をきて、みの、うへに繩を帶にして、ひがさのうへを又おとがひに繩にてからげつけて、かせ杖

をつきて、走まはりて、おこなふなりけり、大かたそのすがたおびたしく、にるべき物なし、殿南

おもてへ出て、御簾より御覽するに、あさましくおぼしめして、御馬をなしたびにけり、

〔明良洪範<sup>二十四</sup>〕春日局

或時夜ニ入テ平川口ヲ二位局通ラレシニ、御本丸御目付ヨリ斷ナシ迎、御門ヲ開カズ、春日ナリ